

強制連行を「事実」だと誤解してはいませんか？

一般に、在日韓国・朝鮮人からよく聞こえて来る“我々は強制連行されて日本へ来た”（要旨）、という主張は、個々の事例に理性のメスを加えて検証すべき筋道にあります。強制的に連れて来られたから“日本社会は我々の生活を保障すべき義務がある”（要旨）、との論旨を、そのまま真に受け鵜呑みにするかの“戦後保障”の論旨がまかり通っています。また、それを裏支えするかのように、学校では、一部の教員組合の徘徊によって捏造史観を刷り込まれ、それら不実の敷延（ふえん）を前提とするかのような加工情報がメディアから垂れ流され、日常の中で、それらを自然に脳裏に植えつけられてしまうかのおぞましい図式があります。いわば、在日韓国・朝鮮人の“言い分”を抵抗なく受け入れさせるかの、無力化した精神性の素地が造られている現実があります。

そこへ、在日韓国・朝鮮人が、史実にもとづけば客観的に虚構としか検証し得ないブラフを日本社会に浴びせ、人権、差別を盾（たて）に乱用するかのように、権利、また権利を主張しています。ブラフを浴びせられる側の多くは、すでに教育、メディアによる積年の誤植による無力化を謀られているため、言われるままに、次々と社会的な恩典を差し出し、国民固有の権利の割譲も厭（いと）わない状況に陥（おちい）りやすくなっています。このおぞましい現象は、説教強盗を親切に接待し言われるままに金品を差し出す姿に喩（たと）えられ、ひいては、庇（ひさし）を貸して母屋を盗られるに等しい愚行と謂えます。それらがあたかも「人道的」であり、「善」であるかに誤解しているケースが観られますが、そもそも、それらは物事の筋道から外れた倒錯に他なりません。

たとえば、二〇〇六年末の、韓国の『日帝強占下での強制動員被害者の真相究明委員会』の調査報告によれば、在日韓国・朝鮮人について、「強制徴用者ではなく、元から日本に居住していた朝鮮人がほとんど」としています。これは、「関係各省で来日の事情を調査した結果、戦時中に徴用労務者としてきた者（の残留者）は二百四十五人にすぎず、現在、日本に居住している者は犯罪者を除き、自由意思によって在留した者である」と。外務省によって公表（昭和三十四年）された在日韓国・朝鮮人の実態調査の結果と符合しています。

「強制連行」が分悪しとみてか、最近では戦時徴用を「強制連行」へと巧みにすり替える新たな捏造が観られます。しかし、待遇を是とする徴用は実に多くの日本人が経験しており、西欧史に明らかな、人を人として扱わない奴隷狩りやその運搬に観られた「強制連行」とは根本的に異なります。まして、戦時徴用についても、朝鮮への適用はさし控えられ、昭和十九年九月にいたって実施され、朝鮮人徴用労務者が導入されたのは、翌年三月の下関―釜山間の運航が止まるまでのわずか七ヶ月間のことでした。捏造による翻弄は、根深いまでの誤認識の温床の上に成り立っていることに気づき、肅々たる理性の検証を以って、先祖代々の日本人は聡明で毅然と在らねばなりません。

理工系による村山談話検証委員会 ならびに日本防衛チャンネル

座長・島津 義広